



聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「国際交流ボランティアに出会って」

おおにしまさこ
大西正子

1941年(昭和16年)
北海道帯広市生まれ
西條崎在住



■ ホームステイしていたチュウ君との再会

最近、友達から「フェイスブックであなたの事を探している人がいるわよ」って言われたの。久しぶりにパソコンを開いてみたら、2001年にホームステイしたチュウ君(チェワードロス・サイル エチオピア出身)だった。イギリスへ帰る時、「世の中の貧しい人を助ける仕事をしたい」と言っていた彼は、国連の仕事をしていたの。

わたしの国際交流ボランティアの始まりは1981年でした。いろんな国の旅行者や大使館の奥様が参加するパーティーでした。友人に誘われて、英語の勉強になるからと参加しました。そこで、日本の家庭が見たいとか、家庭料理が食べたいという方を「うちへどうぞ」と呼び出したのです。子供は手がかからなくなっていましたし、家の仕事もそう忙しかったわけでもないので、喜んで迎えました。家に泊まらないお客様ですから、ホームビジットと言います。日本食に興味がある人たちなので、日本にはこういう食べ物があるのよって、天ぷらを揚げたり、自家製がんもどきを作ってあげるの。汁の中には、お豆腐を。大豆から作ったからヘルシーで、とても身体にいいと言うと、「オオ、デリシヤス」って食べてくれました。

その後ホームステイも始めて、1週間から長い人は3ヶ月の方もいましたね。最初は1986年でケンタッキー州の女の子でした。着物を着せて浅草の観音様や六義園、ディズニーランドにも案内したわ。ホームステイは18年位やっていて、アメリカ、デンマーク、スウェーデン、アイルランド、フランス、イギリスとか、いろんな国から来ていましたね。

■ 帯広から東京へ

北海道の帯広で8人きょうだいの4女として生まれました。父はテーブ商会と言って包装紙や紙袋、紐などの卸売をしていて、豊かな暮らしをしていました。2歳の時、家族全員で亀有(葛飾区)の父の養母のところへ越してきました。ところが、空襲が激しくなるというので、一家は離れ離れに。亀有には母や姉たちが残り、もう1人の姉は集団疎開で福島県の飯坂温泉の方へ、4歳だったわたしと長兄は、元八王子へ疎開したの。元八王子では父が山

を開墾して家建て、そこに住んでいました。父はここで行商をはじめ、カニヤカズノコ、サケの缶詰とかを買って倉庫に保管していたのですが、焼夷弾が落ちてすべて燃えてしまったの。しかも、終戦後には預金封鎖とあって新円切替のために預金を下ろせなくなったんです。それまでの裕福な生活は一転して貧しい生活に。

5年生の時、亀有に転校しました。いじめにもあったわ。なほ 誂りのある言葉に汚い格好、おまけに脱脂粉乳が飲めなかったの、クラスの子に無理やり口を開けて流し込まれたりした。亀有は焼けなかったから、同級生はきちんとしていて、ワンピース着て、革靴をはいてる子もいたの。わたしは我慢するしかなくて。

学校には弁当も持って行けなかった。そしたら、新任の先生がおかずをそっと弁当箱の蓋に分けてくださったの。うどん粉をいっぱい入れた卵焼きでしたが、その味は今でも忘れられない。

亀有では父親は行商をし、ちょっと身体が弱い母親はレース編みの内職をしてました。お料理も上手でしたね。わたしも一家を支えるために朝早く新宿(葛飾区)あたりまで納豆売りに行きました。また、中学3年の時は、口減らして自分から小菅(葛飾区)の床屋に住み込みで働きました。弟子入りしたんですよ。でも、奥さんは身体が弱かったから、ほとんど家のお手伝いさんと同じようなことをさせられて、少しバリカンが使える頃には、栄養失調で脚気になったんですよ。ほとんど学校にも行ってなかったのですが、何とか卒業させていただきました。

■ 主人との出会い

中学校卒業後、上野の職業安定所に行って願書ももらってきました。靴が買えないから、つっかけサンダルで就職試験を受けに行きました。合格して、渋谷の東急文化会館でウェイトレスとして働くことになりました。

高級レストランで、私には別世界でした。夢のような美味しいごちそう。英語のメニュー。ウェイトレスとして働ながら、コックさんに「どうやって作るの」って聞いたり、盛り付け方を見たり、食事のマナーも覚えたの。好奇心が強いね。肉の焼き方とか、デザートとか、頭に入れとくの。た

まに試食会で味見させてくれるのよ。その味を舌で覚えるの。それが今の料理につながっている。

結婚式場もやっていたから、有名な花屋さんが入っていて、立派な盛り花、胡蝶蘭とかカトレアなどの素敵な花を上手に生けてたのよ。わたし、見とれていたの。その人もわたしに気を遣って、余ると花を持ってきて下さったの。わたしが一生買うことのできないと思っていた花よ。なんだか変だなあとは思ったけど、別にどうとは思わないでね。2年くらい働いたわ。両親から「これからの時代は女も職業を身につけて自立しろ」と言われて、麻布にあった電話交換手の訓練所で資格を取り、台東区の信用金庫で働きました。前の職場でお花をいただいた人にはお礼も言わないで辞めたので、いただいていた名刺の電話番号に電話をしました。それが運のつきね。「君に逢いたくて、会社に電話したら、もう彼女は辞めて行き先わかりませんって、シャットアウトされたと思いきらめていたんだけど嬉しい」って。

1961年4月に結婚式を挙げました。結婚式場で働いていたから、式にはあこがれがあって、明治神宮や椿山荘とかのパンフレットをもらってきたのですが、地元の西小松川の香取神社で挙げました。

新居は新堀の義母の実家でした。彼の家は江戸川区の大きな花屋だったので、2人で貸植木というのを始めました。主人の両親の応援で増築したり、亀有の実家の土地に葺き張りの小屋を作って、そこに観葉植物のフェニックスとか大きな木をおいて、ビルとかにリースしたの。わたしも花を自動車に積んで団地をまわって「お花はいかがですか」って歩いたこともあったわ。

男の子3人、子育てしながら実家の花屋の経理の担当をしていたの。1988年、股関節手術で入院した時は、主人が病院まで会社の書類を持って来て「これどうやるんだ」って聞きに来ましたね。

そんな中で、ホームビジットから始まりホームステイを始めました。江戸川ホームステイクラブにもホストファミリーとして入会しました。主人も喜んで協力してくれましたよ。「相手がにこにこして幸せなら、自分も幸せだ」とお互いに思っていたから。息子たちも「今度は誰が来るの」「ハロー」なんて入ってくるのよ。



◆ゴスフォード出身のマーガレットさん
(2015年10月)

ボランティアに生きる

2004年、兄弟でやっていた花屋は経済的な事情で閉鎖。住まいも新堀から西篠崎へ引越しました。寂しいところで、「いやだ、いやだ」って泣いてばかりいたのですが、慣れてきたら「住めば都」の言葉通り、本当にいいところね、近所もいい人ばかりだし。

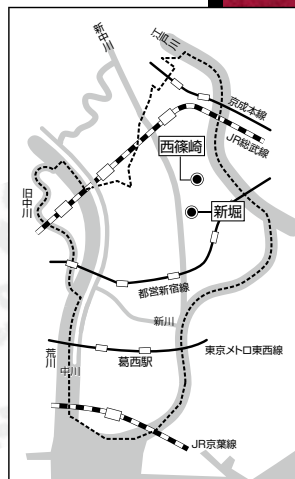
40代後半から股関節が痛くて、51歳の時に人工骨の手術をしたんですよ。今も杖と車の生活。その影響か2008年ごろ、身体に麻痺が来ちゃってね、そのリハビリのためにハガキ絵を始めたんです。区の募集を見て、グリーンパレスまで通ったわ。絵を描いて先生のところに送ったら、先生に「なかなかいい筋してるね」とおだてられて。何年後かには篠崎のコミュニティ会館でサークル展を開いたの。今の絵の先生とは、友人に誘われて個展を見に行ったのが縁で、今も通ってます。

ハガキ絵教室や北小岩の老人ホームで絵画教室のボランティアもやっています。昨年の6~7月に初の水彩画展を行いました。300人以上の方が来て下さいましたね。絵はね、目が見えて右手が使える限りできるし、いい絵を描きたいから頑張ろうと思っています。2013年10月に江戸川総合人生大学国際コミュニティ学科に入学したの。広報誌「ひと あい えどがわ」の編集委員もやらせてもらいました。昨年の9月に卒業しました。

2014年5月、主人は「おはよう」って言っていたのに7分後に救急隊が来たの。心筋梗塞による心肺停止状態でした。一言の言葉をも交わすこともなく他界しました。わたしの人生で一番予期しない出来事ね。主人が亡くなる2ヶ月前だった。処分される猫を「かわいそうだから飼ってあげよう」って連れてきたの。今まで、飼わないって言ってたのに。子供たちが自立していなくなって寂しがるから、猫好きのわたしのために飼ってくれたんじゃないかなと思ってるの。「ゆず」という名前を付けて、今も2人で暮らしています。

7月、ボランティアフェスティバルに行ったら、「今、困っているのよ、2人やる人がいなくて」ってホームステイクラブの人に声を掛けられたの。「わたし、夫が亡くなって2ヶ月よ、ごめんさい、だめだわ」って言ったら、「そういう時だから、元気出して」って押し切られて。そういう方法もあるかと思ってね。花柄の枕など買ってきて模様替えをして、ホームステイをやりました。その時はポーランドの女の子2人でした。この家では初めて、10数年ぶりでした。

ホームステイは今もやっていますが、その国の文化とか歴史とか学べるし、世界で起きたことが生で聞ける楽しみがありますね。「人のためになることをして生きなさい」と言っていた亡き母の言葉を思い出しながら。



- ◆インタビュー/2015年6月
2015年8月
- ◆聞き手/吉野治子 村田正子
- ◆コーディネーター/樋口政則